



## 寄り添い共に歩く

冷たい風が毎日のように吹いていても、子どもたちの元気は変わらず、明るい陽射しがあれば、園庭には賑やかな声が聞こえます。あと2ヶ月で巣立つ子どもたちと、進級する子どもたち。今はもう昨年の春の風景が別世界のように感じます。それはきっと幼稚園中の子どもたち一人ひとりの距離がぐっと近くなったからかもしれません。ドキドキして気持ちをうまく表現できなかったたんぼぼ組は、よく泣いたり怒ったりしていました。カンガルー組さんたちは、そんな場面に出会っても積極的に関わってくれました。とぼっちりを受けても、また次の時にも同じように丁寧に相手の困り感に寄り添って話を聞いて助けてくれました。それを見てきたばら組も、同じように小さい人達にずっと寄り添っています。先週も三輪車に乗りたいたんぼぼ組のH君と私が、あれこれやり取りをしているところへ、ばら組のY君がやってきて一緒に三輪車を探しに行ってくれました。私がY君に何かを頼んだわけではありません。Y君の心が動いて、H君の心に寄り添っていました。そんな日々の出来事が重なって今日があるのだと気付かせてくれる、穏やかな園庭です。

卒業生のB君の話を聞きました。小学生のB君は最近、登校する足が重くなりました。クラスの雰囲気嫌いなのだそうです。B君のクラスには以前からやんちゃなA君がいます。A君はB君とは仲良しです。ところがA君のやんちゃは近頃、度を越してB君もやり過ぎだと思うくらいになってきました。クラスの仲間たちは早くクラス替えになってA君とは違うクラスになりたいと、陰で話をしています。みんながA君を避けるようになりました。そんな中、B君は前と変わらずA君と話しをしています。下校途中、仲間たちが言います。「どうしてBは、Aと話しをするんだ？」B君はそんなクラスの雰囲気が嫌で足が重くなっていました。これを聞いたお母さんも聞きました。「Bはどう思っているの？」「え?!僕が話をしなかったら、A君と話しをする人は誰もいなくなっちゃうんだ。本当に一人になっちゃうから、僕はそれはやらないし、あいつと違うクラスになりたいとも思わない。」お母さんは、はっとしたそうです。私はA君に寄り添うB君の優しい気持ちを嬉しく思うと同時に、その強い心に驚きを覚えました。自分で考え、決め、行動する勇気はどこから湧いてくるのでしょうか。聞けば、A君は、自分のいいところを考えて書くようにと先生から渡された紙に「僕にはいいところは1つも無い」と何回も書いていたのだそうです。そんなA君をB君はよくわかっているのです。＜小学生が排除ではなく、寄り添い共に歩くという行動を選択できる＞“アメリカ第一主義”を掲げて大統領に就任したトランプ氏の数々の発言が頭をよぎりました。誰もがそう思っている世界一の経済大国が、声高に自国の利益ばかりを主張する姿、(何がスタンダードなのかと言うことも疑問ですが)異なる者を排除しようとする姿勢、私たちが世界一の国に求めているリーダーシップからは程遠いことを感じ落胆しています。また、横浜市で起きた「いじめ」に関する調査報告会見での教育長の発言も、私には衝撃的でした。いったい誰が弱者に寄り添い、排除されようとしている者の声に耳を傾げるのか？共に歩こうというリーダーはどこにいるのか？

カンガルー組の子どもたちも年少の時には今のたんぼぼ組のようでした。そう、彼らも大きい組の人たちに共に歩いてもらった人たちでした。それで今があるのです。卒業生のB君にも寄り添い共に歩いてくれる仲間や親御さんがいるでしょう。それが彼の強い心を支えているのだと思います。そして「僕にはいいところは1つも無い」と書いたA君が言葉にできない心の叫びに、B君は気付き共に歩いているのです。小さい人たちが泣いたり怒ったりするのは、きっと言葉にできない思いがあるからだを知っている愛隣の子どもたちは、共に生きる社会を創る人になる、そこには私の希望があります。